

書評

傳田健三 著

子どものうつ 心の治療

外来診療のための 5 ステップ・アプローチ

大森哲郎

著者の傳田健三氏は、子どものうつ病の臨床現場と学会を牽引してきた人である。2002 年出版の「子どものうつ病―見逃されてきた重大な疾患」では、それとして認知されていなかった状態を、うつ病として見る診方を提示した。その後も、子どもの双極性障害や若者のうつ病に関して発言を続けている。

その著者が、自ら実践する子どものうつ病への精神療法を 1 冊にまとめた。新患診察に 30 分、再患診察に 15 分という日常診療の時間制約のなかで、多くの工夫を凝らしながら、子どもと真剣に向き合う様子がありありと伝わってくる。子どもの自己表現に配慮し、家族への対応を欠かさず、認知行動療法や対人関係療法の技法を適宜取り込み、ときには非言語的治療を導入し、しばしば薬物療法を併用する。特定の治療法に立脚するのではなく、持てる技法を駆使して患者ごとに最善を模索する立場なのである。

面接では、村瀬嘉代子氏を引用しながら、単に症状 (symptom) として聞くのではなく、その子自身の痛切な体験 (personal experience) として聞くことの大切さを強調している。診断では、DSM-5 の動向に目配りしつつ、次のように述べている。「ADHD や ASD と診断することによって、すなわちある枠組みを通して子どもを見ることによって、物事がくっきりと整理されてみえるような気がするものである。しかしその反面、一人ひとりの子ども固有の悩みや苦しみ、喜びや楽しみ、そして日常の生活など、大切なものが見失われてしまう危険性があることを知る必要がある」。症状や診断についての著者の考え方が表れている。

本書は 4 章から構成されている。第 1 章は疾患

と治療の概説、2 章は精神療法全般、3 章は家族への対応、4 章は非言語的治療である。副題の 5 ステップ・アプローチとは、見立て・診断から始まり、生き方や特性・性格へのアプローチにまで至る、治療経過につれて展開する 5 段階である。

全体を通じ、子どもの臨床は家族との共同作業であることに改めて思い至る。「親もまた苦しんでいることを理解する」、「親から学ぶ謙虚な姿勢を忘れない」、「子どもがどんなに親に悪態をついたとしても (中略)、子どもにとって家族はいつでも唯一最大の支えであることを説明する」など、基本的作法がきっちりと説かれている。

各章に、詳細な症例記述を配したのは本書の優れた特徴であり、あたかも診療に陪席しているかのような臨場感を醸し出している。いじめが関与して不登校となり絵画療法によって完全回復した少年が、10 年後に典型的なうつ病患者として著者の前に立ち現われ、小学校のときも今と同じ状態だった、と述べるエピソード。この言葉をきっかけに、著者は心理環境要因の背後に伏在したうつ病に気づく。まさに患者から学ぶのである。

著者が強調しているのは、特殊技法ではなく、むしろ診療の基本であると思われる。しかし、名選手の華麗な技も実は基本動作の組み合わせから成り立っている。多彩な治療場面の平易な解説は、児童を専門とするものならずとも興味がつきない。(徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部精神医学分野)

●B5 152 頁 2014 定価：本体 3,500 円＋税
新興医学出版社刊